

「悲愴」、作品の持つ悲劇性、ドラスティックな断面は消去。素直な穏やかさに軽い拍子抜け、オドロオドロシイ序奏のスタートはなく、息を詰め身構えての過度な感情の移入は感ぜず。有名な2楽章、品のよいロマンチックさの香り、甘さベッタリの感傷さとは隔たり。そのバランスで全体をコントロール、これがピアニストの意図するアプローチ、描きたい音楽のストーリー、聴き取り易さスナリ心にフィット。

「スケルツォ2番」、オーソドックス丁寧に誠実に歌う、前の曲に情緒的要素をプラス、かといって、過激にエキセントリックになることなく。慌てず丹念に美しく、ダイナミックな跳躍、流暢にコントロール化。中間部、手を変え品を変え、畳み掛けるパッセージ、カラフル鮮やかにコレデモカコレデモカ。いろんな演奏家にて生で聴く、ピアニストでも5度目かしら、興味褪せることなく楽しめるモノ。

後半のヴァイオリン、アンコールの2曲にて、ホッとした穏やかモード、落ち着いて楽しむ。プログラムでは大きなハードル、クリアのための集中感、そのプレッシャーからの解放。(2017.9.6)

---

ベートーヴェン：ピアノソナタ 8番 ハ短調 Op.13「悲愴」

ショパン：スケルツォ 2番 変ロ短調 Op.31

ブラームス：ワルツ 変イ長調 Op.39-15R

J.S.バッハ：無伴奏ヴァイオリン・パルティータ 3番 ホ長調 BWV1006 から ガボット

サラサーテ：ツィゴイネルワイゼン

ブラームス：ヴァイオリンソナタ 2番 イ長調 Op.100

(アンコール)

モーツァルト：ディヴェルティメント 17番 K.334より「メヌエット」

フォーレ：夢のあとに

---